

生 實

第一卷第二號

- | | | | | | |
|--------|----|-----------|-------|-------|--------|
| 白道會だより | 巡禮 | 因襲生活を超ゆる迄 | 懺悔錄 | 眞實の宗教 | 平凡を希ふ心 |
| | | 中野尅子 | 自由俱樂部 | 濱阿彌 | 土屋觀道 |

祈り

私らには根城はない誌を超えて融け合つた魂しひの上に王國がある。
一切と抱き合つた裡に潤ひがある。

愛に結んだ心の世界に如來が降て在ます。

總てを教へて導いて下さる。

み意の儘に動かして頂く、はや私でなくてみ佛である。

六合に亘る聲を以て一切を破砕して叫び給ふ。たゞ純眞な自己の相、佛の姿を記録したい。

それは何人にも宥されたみ恵みである。

自らが灰を被つて淨まると俱に一切を潔めずには措かぬ。

個愛でない他愛でない自利でない利他でない一なるものへの全的奉仕である。
それ以外に私らの生命はない。

それ以外に佛の使命はない。

一切を超えて愛を遂げよ、一切が翼の下へ聚つて來てる。

たゞ我れ克たん。

平凡を希ふ心

□蔽ひが消え、凍りが融けて天地が新色に甦つて來ました。

□際物的特異から解放されて平調な順化が目立て來ました。そして衷心的な價值への深化が默々の中に強められてゆく。もう何と煽てられでも騒がぬ時代が來ました。眞實生命の基調から一切が割出されて一分も隙が無い、人氣當ての欺まかし物には釣られませぬ。却て嘲笑を浴びせ掛けます。そう何時迄も睡ては居りません。眞生の煌きが全てのものを通じて火花放電を演じて來た。

□坑を衝いてはより新しいより温い泉を掘り當て様と努めてゐる。眞に善に美に、最後の聖に由て淨化せんと歡び勇んでゐる。分化の統攝、來迎の御手は垂らされてゐる、光りの世界が明けつゝある。

□平凡なものが特殊を造る。新しいものを要する時其れが舊いのである。最後に來るものは最初のものである。眞劔な刃が宗教に依て磨きをかけられてゐる。祈りの清さと鋭さが全ての事實の上に要求されてゐる。妥協的苟合で無くて衷心的凝集が新生の世界の本質である。ウマルスやハリソンの叫びが思ひ附きの臺詞でなくて、人類苦の求めである。骨董的佛に非ずして活きた如來が必要になつて來た、一切に力たる愛と潤ひが呼ばれてゐる。

□七度刷の概念で無くて膏に光つた體驗が骨である。觸れたのでない漉したのでない、裡から溢れる創造が一切を割つて質成を型る。批評と破壊と表現との上に無限の進展がある。永劫の探究と向上に即して無限の進化と不滅がある。人格と生活に悔ひあらしむるな。

□還愚の凡生が至高文化への手習ひである。如來と偕なる活きた進みが總てへの廻向力である。平凡なる祈りに籠めて搏ち出す處に全てを解決す。神人不二の赫熱を瑣事の上に還す時悉くを聖め、悉くを燎さ盡さすにはをかね。凡中自ら非凡を藏む。

眞實の宗教

土屋觀道

「宗教とは神と人との關係である」と多くの宗教學者はいつて居る。私共をしていはしむれば又如來と衆生との關係である。如來を中心として如來の如く完全に到らんとする人類の理想運動とも云ふべきである。即ち私共の根本要求たる永遠の生命と無限の向上とが神を中心とし、如來を中心として完成せられるの運動である。斯くの如きの宗教は人類生活の根本要求であつて人類自然の發露とも云ふべく、殆ど如何なる時代と民族とを問はず世に行はれたる事實であつて、今も尚ほ現に此の世に行はれつゝある一つの事實である。然乍ら更に一步を進めて宗教とは何ぞやと之を自己の本心に尋ね、社會の實際に對して學究的に説明し、又は自から意識しやうとするには中々の困難である。固より自分に宗教信仰があるか無いか位は判然するやうであるが、更に信仰の對象たる神佛を明かに意識し、而かも其神佛に對する信仰の關係を明かにせんとするは更に困難な問題である。

然し一般人類の生活の中に宗教信仰ないかといふに決してさうではない。明かに宗教信仰形式の内容は多くの歴史の上にも今日實際社會の間にも發見する所であるが、其神佛とは如何なるものを云ふのか、世に果して神佛なるものありや、神佛の世界と云ふものありや。若し在りとせば如何なる状態にして

何れの處に在りや、又人類と神佛との關係は如何にして其世界に達することを得るや、など色々の疑問や質問も來たすのである。否現に古來から宗教と云はる可きものの現存する傍ら一方には是等の問題が人類生活の歴史の上にも事實として考究せられ來、又一面には今も尙最も眞剣に考究せられつゝある所の一大問題である。而かも自から已に神佛を信じ人にも宗教信者と稱しなから、神佛其もの、如何なるものかを、更に一層強く認識せんとして努力研究せる人々も甚だ多いことである。然乍ら此の信仰の問題は人類要求の根本に屬するものであるだけに、單なる智識の考又單なる道德や感情を以て満足すべきものでもない。而も歴史の示すところに據るも又私共の宗教經驗の上より見るも、宗教信仰の形式内容は其人と處と時とによつて一面は常に變遷しつゝあるやに見ゆるのである、即ち宗教は人生生活形式の變化につれて、其信仰の對象たる神佛の内容を亦自からこれに對應して變化し行くやうである。そこで其時代生活の様式や人類文化變遷の程度によりて、神佛に對する宗教信者の信仰内容も其趣を異にするものがある。だから假令其時代並に其信者其人に於ては絕對信仰の對象となつた神佛觀念も、其時代を異にし其人を別にするに従つて必ずしも其時象が同じ對象となり得るとは云へないことがある。尙進んで云へば同じ一人の宗教信仰の上に於てさへ、未だ完全に無い限り、而も人類が社會生活の影響を受けて進化するものと見うる限り、信仰そのものの内容形式も之に應じて相應に變化し來るものと見る可きである。これ多くの史上に私共の實際見る處であつて、亦私共の信仰生活の經驗内

容の上にも常に實見する處である。

然れども斯くの如きの事實が如何なる状態に顯はれ、又如何なる状態に變遷し來り、又變動し來りつゝあるか、之を幾多の宗教的偉人の態度に眺め、又幾多人類思想生活の歴史の上に考察し來るとき、私共は茲に人類自由の正義と博愛の主張とが、沛然として宗教信仰の上にも漲り來ることを感得せられず、にゐられない。而かも此の事は人類生活の思想中心であつて、或は政治に經濟に、或は倫理に道德に、時代は一大轉期を來たしつゝあることを發見するのである。此の時に當つて現代に唱道せらるゝ既成宗教を見るに、之等は果して我等を救ふ可き充分の形式内容を備へ得て居るであらうか、多くの寺院と教會とは果して此新らしき意味に於ける現代の宗教要求を完備して、之等の要求に應じ得てゐるものであらうか、ともすれば反つて人類文化の眞實向上の大道をさへ、妨げてゐるではないかと思はれるものがある。今の世の葬式や法事が宗教の中心でない事は云ふまでもなく、世にありふれたる佛前の讀經や亡者の回向などすることが僧侶の本分でないことも勿論である。今や眞實の宗教は人類思想の中心生命たる神と人との關係を説く可きであり、人類の理想生存の意義、眞善美なる神の世界を紹介し、人類の正義と自由と平和とをとなし如來の大悲の上に宣傳すべきの時である。然るに現代の社界は何を示せるか、そこに人生の矛盾がある。此矛盾を破る處そこに生存の意義がある。宗教は實に人生改造理想の中心の生命である此の力此の信念こそ即ち神が私共に與ふる光であり、大悲である。然るに現代の社界は未

だ眞實に此の光を知らず、正に一大人類の反省を要す可きの秋である。此の人類の反省こそ即ち世界人類の最も大切な事である。

然らば何をか人類の反省といふか、夫れは眞實自分の生活反省に外ならぬ。今靜かに人類生存の本義を研ね、我等は何を爲すべきか。人類生存の意義如何、眞實の望みは何であるか、眞實の生活、眞實の樂み、眞實の價値は何であるか、夫れは私共自身の理想であり、眞實要求に向ひつゝある理想實現の世界であらねばならぬ。理想なき人生は少くなくとも其人に於ける望みある生活ではない、又力ある樂みの生活とはならぬ、少くとも自己本心の充實せる満足ではないのである。即ち理想なき人生は死の世界である。私共は日夜理想に生き働く所、そこは是程人生のうれしさと尊さと生活の力とを實感するものはない、どんな困苦の中からも眞實の望みが絶えない限り、私共は之を忍びて此の困苦を切り開き。其前途に向つて奮進の大勇を起し得るものである。理想は人生の光である。然乍ら私共に果してどれだけの理想があり、樂みが眞實眞實にあるであらうか。理想は人生の樂みである。然るに私共の樂みが若しも理想に一致せず、むしろ相反するやうなものであつたなら、それこそ今迄の樂みも忽然として其樂みを絶つに到るのである、凡ての力も此の理想に反しては無力となり。凡ての生存も此の理想に反しては無意義と爲る。然らば人類の理想とは何であらうか、高遠の理想人類最高の理想とは何であらうか、人類生存の意義も此の理想實現の上にこそ始めて眞實の意義を爲すものではないか、此の理想

こゝ始めて私共の一切の生活を、望みと力と喜びの中に、統一し指導して行くのである、國家の理想も世界の理想も否世界人類の理想まで、此の人生の理想あつてこそ、始めて統一し整理して行くことが出来るのである。

之に反して若し私共の日常爲しつゝある一切の生活が、何等の理想も價值もない其日暮しの單なる生活に過ぎない事であつたなら、此の人生程味氣ないものはない。而も毎日同じ事を繰り返しつゝ過ぎ行く事は更に一層の悲哀である、然らば私共の理想とは何であるか、金を益ける事が名譽を得る事か、そこには人生永遠の光はない、而も働いてさへ尙食へぬと云ふ悲惨の狀態も襲ふてゐる、それにかゝてまゝならぬ世の中とは誰れか云ふたか、榮枯盛衰常ならず愛別死別の懷みの事實である、然乍ら人は此の世に生存する以上本能的に常に應分の生活體系を望んで止まぬ、而し此生活とは何んであらうか。之を外から見れば單なる一つの生理的生存のことに外ならぬけれども、此の生理的生活の一事實の中に幾多の問題は秘められてゐる、そして人類思想の内面的要求も更に一層に甚妙を極めてゐるのである。而して人類生活の基本たる永遠の生命と無限の向上の要求も、そこに大なる光の本質として示されてゐるのである。して見れば永遠の生命も無限の向上も現實より更に進んで即ち一切を理想實現の姿として、全分に生きんとするのであると云ふべきである、否それより外に眞實の理想生活の仕方はない、唯それが完成するところ即ち哲人の宗教眞人の生活である。即ち私共は決して只今の様な現實式

けの人生の一生で満足の出来るものでない、私共はどういうものか既に爲したる行爲の中に十全の満足を感じるよりも、之より爲すべき理想の世界にこそ寧ろ眞實の喜びと樂みとを發見するものである。して見れば私共は眞の世界を之より来る理想の世界に求め、其の理想の現成に進まんとする努力實行の上にこそ誠に強く新たに、力と望みと喜びの眞善美妙の理想世界を充分に味ふことが出来るのである。而も此理想世界こそ吾人が實感し得る處の神佛實在の世界である。而して此理想に至らんとする吾人の願は願である。實行とは此に達する行である。而して此理想と實行とを綱ぐものが即ち信仰である。故に如何なる信仰にも此願行を具せないものは無い。即ち願は希ひてあり理想である。行は力であり實行である。故に理想なき行は行とならず、行無き理想は理想でない。故に眞實の信仰には必ず自ら願と行との一致がある。即ち願行具足の信仰となるのである。そこに信仰應分の體驗は顯はれ理想實現の信仰となつて来るのである。故に私共の理想宗教信仰の體驗も此歸命一念の當體に永遠の生命と無限の向上とを體達するのである。而して此信仰の確立こそ尠くとも其人各自に於ける應分の體驗であつて、同時に神人一體の理想實現の世界である。然し乍ら各人應分の理想是れ果して私共の最高理想であらうか。若し然りとせば私共には各人の世界となつて甲人の理想地必ずしも乙人の理想地で無い事もあり、乙人の理想必ずしも亦丙人の理想地とならぬ事もある。而らば宗教の各人各異のもののみであつて此を統一し綜合したる宇宙唯一の絕對信仰の世界は無いが、信仰の對象として人類生活の中心生命たる

神佛。最尊の世界は無い。一切宗教の中心本尊たる如來の實在を信認する事は不可能のものであらう。是れ私共の更に進一步の考察を要する處である。否なればありてこそ而かも私共の信仰は更に大なるものとなる。變りゆく自己の信仰を統一して常に向上し向上し進む事が出来るのである。爰に於て私共の理想は更に大なる理想とならなければならぬ。人類の理想は宇宙の理想萬有の理想でなければならぬ。萬物の心は宇宙の心即ち萬法一體の理想の世界であり、宇宙唯一の眞如界清淨無漏の靈界が即ち私共の本心の世界である。宇宙の一員として宇宙の理想を實現する事が宇宙的人格の體驗なる事を自覺すべきである。

理想なき國民が國民たるの價值なきが如く理想なき國家は國家たるの資格はない。それと等しく理想なき人類は人類たるの資格はない。人類の理想なき處に何うして世界の平和は有り得やう。即ち宇宙の理想が即ち國家の理想で無ければならぬ。人類は同朋であり萬法は一體である。そこに國家の存立の意義があり、國民生活も價值がある。人類の理想は即ち宇宙の理想であり、愛の世界であり、慈悲の世界であり。萬法一如の同體の大悲界である。此大悲の心こそ即ち神の心であり如來の世界である。而してそこて其處が私共の本心の世界であり、本心の世界は永遠の世界であり不滅の世界である。而してそこを諸願滿足の世界であり萬人同體の慈悲の源である。眞理の世界も此處であり善美の世界も此處である。聖なる御國も此處であり、一切の道德も藝術も總ての哲學も宗教も此絕對唯一の大悲願海の莊嚴に

外ならぬ。萬法の本源宇宙の本體、そこに神の國佛の淨土が発見せられて来る。永遠の生命と無限の向上の世界、一切の悩みの無い處、諸願滿足の世界、其處は理想の世界である。理想の世界は現實の世界でない。而して現實と離れた世界でない、此世界こそ私共の本心の要求する世界である。人類の進歩も社會の向上も要するに此理想實現の道程と言ふ可きである。故に哲學も道德も藝術も此宗教を離れては眞實世界とならぬ。神の國佛の國、そこは私共の故郷であり、私共の歸る可き世界である。人生の一生は此理想眞實の世界に到る道程に外ならぬ。實に宗教は正に人生生活の中心であり、生命であり、一切生活の根元である。此信仰が願行の形を取る處、そこに祈りがあり念佛がある。(二二、一八)

一本の花も無駄には折りたくない、一粒の米も無駄には流してやりたく無い、各ちで一本のマツチも惜しむのではありません。其一本の中に光つてゐる澤山な人々の骨折りや親切、無量の縁と力とを念うとき、本當に涙の零れる様な深さを感じます。皆んな「菩薩様」です。美しく咲いてゐる花の心や、其いびらしい生命を思ふと、連も生木を割く氣にはなりません。而して其花を机の上に挿し、マツチを擦つた以上は、其「光り」「麗しさ」よりもっと偉大な價值を産み出すには居けません。後で「無駄にせなかつた」と省みて、疚しく無い丈の値ちある營みをせねばなりません。

懺悔錄(抄) 其一

濱 阿彌

あゝ私の本體に在ります如來様よ。アナタは私の凡てを知り盡し居玉ふが故にアナタの御前には既に隠す處はありません。然し乍ら今私の赤襟々をアナタの知り玉ふ處の如く告白せんとする事は、實に大なる苦痛であります。其上私はまだ進歩の過程にあるものですから、發表の仕方も拙いし、總ての點に於て私の眞實が正しくあらはされるかどうか、夫等の邊を思ふに付けても、此懺悔がまだ時期が早や過ぎるのではあるまいかと躊躇させられますが、えい儘よ。何事もアナタの思召の儘に思ひ切りませう。私はアナタの御前にはちつともつらくはないのですが、筆に顯はす事が本當にづらいのです。然し今は喜んで筆を取らせて頂きます。私の身邊を廻る汚穢や虚偽が茲に一掃される事を思へば、他の嘲や罵や憤や諷やは顧慮するには及ばなかつたのでした。あゝ私の唯一なる如來よ私をして大膽ならしめ給へ。飾る處なきの

勇氣を出しめ給へ。

○幼年時代

あゝ私の大御親に在ります如來よ。私は今私の幼年時代から話させて頂きます。幼年少年の時代を略して求道から筆を起す事は寧ろ樂であります。が、それでは懺悔が割引されて、眞實の下座が行はれません。随つて私の生立から筆を取ることは私に取つて大なる苦痛であり且つ讀者の倦怠を誘ふて申譯ありませんが重なる二三の概略を懺悔させて頂きます。

私は明治十七年の五月に今の某寺に生れました。私の父母は私の姉と兄とを失つた跡の貴重なる子として嚴格の中にも我が儘に育て、下さいました。如來様よ、アナタの知り給ふ如く、私は病身の爲に夜も晝も、むつがつて母を困らせた相です。私は實に私の死ぬ可き生命、云ひ換れば生ける死とも云ふ可き此顛倒の世界に何處から來たか何しに來たかも知らずに生立から母を困らせたのです。少し加減の悪い時は少しも寝かす夜もすがら背の上に泣いて泣きぬいて母の心を苦しませ

たとの事です。やゝ長じまして段々健康になりましたが、それでも血の氣のない青瓢筆の才拙頭をした弱い兒でありました。而して友達からいぢめられて能く泣いて斗り居ました。而して常に強い友達を恐れて「影辨慶」とか「家の前のしやか犬」とか云はれました。けれども小學校に行く様になつてから、自ら餓鬼大將を志願し出しました。随つて一方の餓鬼大將からいぢめられる事も度々でありました。そうかうする内に嚴格なる父は私に漢籍の素讀を教へ初めました。けれども愚なる私は何の爲に學ぶのか、學んで何の用をなすのか知りません。勉めて解ける事を考案し、つとめて反逆の言葉と行爲とを用ゐました。茲に於て鐵鞭と煙管とは毎朝頭上に加へられて長さ一寸位の瘤の一つ二つは絶へた事ありません。曉の樂園の中の甘き眠は蒲團をお尻の方から捲る事に依つて霜と消えます。直に朝の勤行に参ります。が眠がまだ足りませんから居眠を致しますと、大きな木魚のバチは背中を思切りどやし付けるので、終には泣き出します。夫れから表庭の掃除、夫れから學校へ

行く時間迄父の前で素讀を習ひます。然し乍ら此の素讀の時間が實に大變なのです。父への反逆と呪ひと、私への怒號と體罰とが戦ひます。結局どつちかが負けて小學校への時間が参ります。勝は大概父の方に有ります。小學校から歸へると夕方迄解放されます。之が私に取つてどれ丈愉快でありましたか判りませんでした。夕食が終ると二分心の薄暗いランプを取り圍んで夜仕事をいたします。私は素讀の復習か御經の稽か稀には支那の歴史譚などを聞かされます。而して九時か九時半には寢床にもぐります。之が私の日課でありました。私がもし従順であつたなら如何に恵まれたる幼年時代でありましたでせう。今になつて思へば父は父としての最善を盡くして下さつたのでした。本當によい父であつたと拜ますには居られませんが。然し乍ら如何に私は愚鈍でありましたか。私は父がさらにひで恐ろしくて堪へられませんでした。執拗に反抗し敵對いたしました。かくて咎たれ縛られ灸られました。而して怨み憎み問えしました私は幾度か川にうろつき野にさまよひました。

母は陰になり陽になりて私を慰め私を悲み私を勵ましたし、而して姉と共に川や野に彷徨する私を捜しに來て下さいました。

お、私の滅罪に盡くし居給ふ如來様よ。私は今私の歴史を彩る醜さの一つを語り了へました。更になほ深み行く醜さに語らしめ給へ。妙にいじけ曲がたる私は一方に又た盗み心を持つ様になりました。父は行爲に嚴格であつた如く、金錢にも厳しかつたので、私は他の小供達の如く金をもちません。私は毎日二厘か三厘の小遣で濟まし、而して他の人の様な帽子も羽織の紐も持ちませんでしたから、私は私の貪慾を満足せしめんとする心に燃えて居りましたが、段々炎は大きくなりまし、終に金を盗みました。あゝ如何に悪ろしかりしよ。隠し／＼遣ひましたが二三日の後榮華はさめました、而して嚴しい／＼刑罰を受けました。其時はモウ決して爲まひと悔ひましたが然し何故にかく迄厳しく罰せらるゝかは判りませんでした。此時は母も父の身方でした。父は柱に私を後手に縛り付けて折檻致しましたし母は私の兩足に灸を

すゑました。本當に懲りました。然しあゝ弱き者よ。第二の誘惑は又た參りました。それは永らくアメリカに居りました。法兄達二人が歸朝して色々めづらしい物をトランクに詰込んで寺に參りました事から始まつたのです。私は其頃田舎では見る事も出来なかつた洋服とカラーと靴とを土産に頂きました。晝の付いた大きなカラーで飾られた小兒服は私の心を幻惑させて有頂天にし而して小さな誇の満足以酔つて仕舞ました。其極は滑稽にも「私がアメリカに行つたのだ」と云ふ氣に成り切つて居りました。あゝ今思ひ出しては耻しい！而して大膽にも兄のポケットから鍵を盗み出してトランクから色々な品を所々に隠しました、而して時々夫等を持出しては友達に拙い誇を見せました。然し友達には私よりズツと伶俐でしたから段々嘲笑する様になりました。私は羞恥の苦痛とを味ひつゝ、抗辯しましたが友達は一層冷笑と冷罵とで迎へる斗り益々羞恥を深めて自分乍ら居ても立つても居られない程でありましたが、終に私の罪惡は父兄の前に暴露すると同時に友達の間にも知れ

渡りました。あゝ如何に恥かしかりしよ。あゝ呪はしき竊盜と虚言と修飾とよ。あゝ如何に拙かりし私よ。

然し乍ら私の大慈父に在ますアナタは、拙かりし私を現今の私に許して下さいました事は實に私に取つて一大驚異です。此事實丈でも讃歎の言葉に窮します。

因襲生活を超へる迄

——寺院生活の改造に就て（續）——

A 「先日は有難う存じました。其後私も又色々考へました。が變うしても今後の寺院は理想的に根本から改造せられねばならぬと思ひました。今少しく寺院其物が醒めて社會的にも活動しないならば、寺院の存在の意義が無いと考へました。」

B 「私も夫れには同感です。が此世が一朝一夕で成立つたものでない様に、寺院もさう急激に改造せられるものでもありません、さうして同じ改造と云ふ中にも種々あつて、寺院内からの改革

と社會の側からの改造との方面があり、而も此二面が共同的に善意に改造してゆく可きだと思ひます。全く此なりでは社會が寺院を見捨てゝ行く事になりませう。」

A 「然しそうなると寺院の改造ともならず、又寺院生活の改造ともならんのではありますまいか、今私の聞き度いのはどこ迄も寺院の存立を許しての事であつて、其寺院の生活情態を如何に改造すべきかと云ふ事でありませう。」

B 「夫れに就ては私も色々考へて見た事であるが、先づ寺院並に僧侶の存在の理由を明かにして、其上で寺並に其生活者自身を此理想の下に改造せねばならぬと思ひます。如何なる場合にも此理想を外にして唯徒らに改造々々と叫んでも實行する事は出来なideせう。」

A 「それは其寺院並に寺院僧侶の存立の理由とは如何なるのですか、各寺院に於ては已に各宗規や宗義が有て其れに因て立つ可きではありませんか、名のみ寺院であり、形のみ僧侶の姿をしてゐても實際の宗義に合はないものは寺院でも僧

侶でもない事になるでせう。」

B「私も一時はさう思ひました。然し果して今日社會に於て宗門宗義と云ふものをどこ迄眞實に知り得るか、而も亦さうする事が果して今日の人類生活に幸福であるかは考へものであります。」

A「さうすると貴方の謂はれるのは寺院生活の改造は不可であり、又其必要もないと云ふ事になるのですか。」

B「否やそう云ふ譯では決して無いが今日の宗意宗義が果してどれだけ宗教の本質に契てゐるか、と云ふ事が私には考へものだと思ひます。凡そ宗教の實際は其時代の人々をして救済せん爲めに現はれたものであつて、畢竟り一面から云へ時代要求に相應した宗教が新たに現れて来るべきであつて、今日の時代には今日の時代に適應した新宗教が出づ可きであります。今更ら七百年も千年も昔の宗教を其儘持て來なくてもよく、又持來る事も來來ないものである。世に宗祖に還れなど云ふ人が往々あるが、餘程考へた上でない」と自らを誤り世人を過らす事になりはせぬか、何れの時代にも

世の變遷につれて一時復古的傾向の一脈が隆んに現はれる事が有るが、夫れは新思想の要求や眞實宗教の要求に伴れて唯だ反動的に興つたものに過ぎない、其れよりも眞實にして新たな時代要求に適合した宗教が出現し來るものであるまいか。從て今の寺院や寺院生活は是れ昔の宗教であり、又其形式に止るものであつて、此れでは時代の要求にも應ぜず時代の宗教では無い事になりませう。尤より今直ちにそうと總てを斷言する事は出來ないが、現に此世の大勢と寺院生活の内容とを靜かに考へ來る時私は今少し各々が考へ直す可き時では無いかと思ふ。改めて爰に新宗教と言はずとも時代と相應し時代を指導し救済する宗教信仰の實質上に反省せなくてはならない。如何に形のみで改造と言て見ても其れは單なる世間向きの一時的手段で眞實宗教の根本精神を無視したものと云はねばならぬ。殊に今日の寺院生活は其存立の眞義に觸れ其眞の仕事爲しつゝあるか。僧侶自の信仰身は果して其人自身に於て眞實であるか、麼うか。寺院が老人の遊び處となり寺院が古物の

拜觀所となり、或は僧侶自身及び妻子の食代となつては居ないか、甚だしきに至つては寺院が在俗の食物となり、或は單なる葬式法事の場所として亡者の世話やき處となつては居ぬか、此寺は大に私共の考へ直す可き點では無いかと思ふ。更らに信仰中心の本尊佛の確立や、信徒と寺院、寺院と社會。色々と考へ來る時私共は此等を何うしたならば眞實宗教の本態に改造する事が出来るか、實に大切な事と思ふ處です、私にも已に十數年來常に心から憂ひ其改造を計るところであるが、世人特に寺院僧侶解の方で私の本意を誤つて單なる破壊の爲めの攻撃であるかの様に反對せられるのは遺憾とする處である。此れ未だ眞實の信仰を中念とせざるのみならず、眞實愛宗の念無き者の誤解であらうが、一度此私共の眞實なる叫びと其改造の必要とが寺院各位に理解せらるゝ時、必ず其説の眞實にして寺院改造の急務なる事が是認せられるに至るであらう。然らばそれは何であるかと言ふに、其は各人の目醒め即ち眞實なる信仰に生きると云ふ事である。自分が先づ眞に道を求め眞に

信仰の人となることである、宗教は人類生活の中心であり、其人に於ける生命其ものでなければならぬ。眞の如來を信ぜりや、眞の神を信ぜりや、自分の生活は信仰の心よりなされてゐるか、人に接しても自分に對しても一切の生活は信仰より出づるものなるか、如來は人類理想の中心であり吾人の生命である。如來は大悲のミオヤであり導きであると本當に心の中に信せられてゐるのであるか、如來を信じ如來を信じ如來に生きると云ふ事が眞實生活の中心に在つてこそ初めて寺院改造の基礎も成立つのである。」

A「して見ると寺院生活の改造は先づ何よりも寺院僧侶の精神的改造よりすべしと云ふ事になるのですか。」

B「左うです先づ何事よりも今日の所是れ程大切な又急務なものはないのです、是れさへ成立すれば其他の事は自ら時代に適應し、時代を指導する一切の施設も必ずなし遂げられる事となるのです。思へば一切が精神主義でなければならず、社會の文化も要するに此精神が根本です。寺院改造

の根本も先づ此信仰の人とならねばならぬと云ふ事です。而し乍ら今日の所直ちに此れを實行すると云ふ事も困難です、そこに私は恐る可き寺院の破滅解體が近付いてゐるのではないかと思ひます。」

(自由俱樂部にて)

* * * * *

春光——目に見えぬ春と云ふものが來ると
全てのものが頭を擡げて來て一聲に踊り初める。
太陽これを照らせば塵埃も亦輝く。内なる
佛の光りに催されて皆が踊らずに居れぬ悦
びの春が待たる。

* * * * *

巡禮

中野 尅子

自分で自分の姿が少しづつ判然りして來て初めて陰法師の振舞が段々明かになつて來ます。それは自分の「意」天けが段々私を見張て居て下さる如來に聖化されて、私の中から抜け出して高い處から見下す様になるからであります。此自の中に自他の分立が行はれて二つが益々駆け距つて從て陰法師は毎日泣く様になりまして、自分を自分で觀賞し批判して不満足に思ふ事が愈々痛烈となつて來ます。自らの愛慾と煩惱、弱さと罪とを今更らの如く氣付かずには居れません。而し斯く氣付かせる様に働きかけてる第二の我を深く味はうとせないから徒らな自屈悲觀計りであるが、然し純な深刻な本當に痛々しい生き振ります。人間苦に涙する時より美しいものがありませうか。而し其處獨り嘆て居る様な生やさしい時は永くは續きません、必ずや自ら行爲を改め様と奮激せずには居れません、陰法師が自分の力で頭巾を脱がうとするのです、而し幾度誘惑に勝たうと淨まらうと務めても益々醜い迹を増やす計りで、追はうとする蒼蠅が一層たかつて來る様な有様です、子供が喧嘩して泣き乍ら相手に掛つて行くやうに一生懸命恥かしく無い生活を爲て見やう、圓い人格を築かうと勉めても終に成し終せぬ、此「自淨」に破れ傷いた戰慄者には「潔まる力」も無く「愛する力」も失せて只ドン底に鬼と化せん迄と、徐ろに最後の至るを待つばかりです。而も死んだとて此自己の印した汚點は永久に塗られぬ、死ぬに死ぬ絶體絶命の地獄です。其時「神」と云

お詫び

豫告もしなくて勝手に創め、突然皆さまの元へお送りして、無理壓し付けに押賣がましい振舞ひをした事は、随分お怒りでも無いませうがお恕下さいませ。

實は私どもも昨年夏から念つてゐて、創刊號は年の暮れに既に刷り上げました。そして漸く泥の中に埋つてゐた此車が廻り初めたのです。實に生るべくして生れてゆく法爾の力だと信じます。塵うか皆さまも力を協せて一所に盛り立て、行つて下さい。

此れは如來さまが私共に授けて下さつた一の仕事であると信じます、其心意を慮しくせない様に全分を擧げて盡します、お互に佛の心を持ち合ひませう。

お詫びに兼ねてお願いいたします。

ふものに縋れと教へる懶巧者がありますが、此時には「佛」に頼んで此自分の造り放しにした惡を、代償して貰うなんてズルイ氣分は毛頭起らぬ。陰法師は身を震はして永恒に自己に泣く、氣を張り上げては立上るが忽ち朽折れる、「救はれぬ魂」の業に喰殺される斷末期が莊嚴さ。此完全を慕う心と不完全に傾き勝ちの心、善と惡、愛と憎、二律背反の暗闘裡には唯何となり成る様になれ、此渦中をも泳ぎ渡る力を我に與へ給へと、總てを抛げ出して祈るより他には仕方がありません、自分の無力を自覺して訴へる——それは弱者の態度でなくて強くなり切つた極點です、自分で自分を押し見て見やうなどと試みてる餘裕がなく、全自己を一氣に叩き付ける勇者の斷行です。一人で動けぬ陰法師であつた事を知つて今迄忘れて居た第二の自分を凝視める事です。陰法師が我儘に獨りよがりをしたとき脱線であり惡であり罪であり悔みであります。本來我陰を影せしめてゐた本體に醒め彼の使命の儘に動くとき惡ひと愛ひ無く極めて氣樂である。自ら惡と氣付いた時は根本善たる彼と對比してゐたからです。決して佛には頼らぬつもりであつたのが、何ぞ知らん佛の姿が既に吾が裏に成り立てゐた。佛から轉落した刹那に自己を責め苦しく感じてゐたのだ、常に「善くならう」と佛を懇して惹かれてゐたのだ。自己は第二の大有己たる佛の陰法師であつたのだ。そして彼と無關係で動かうと努めたから問へてゐたのだ。佛と我とは一であつた。此儘操られてゐたのだ。救はれてゐたのだ。佛が度の中に生きて居られ佛の中に我が居るのだ。我が佛であつたのだと明らかに「祈り」の中で感得られた。其後我れに借る佛は有り有りとして當に現はれ一切

の指圖をして下さる、そして不思議に今迄の不可能事がスバ／＼と成し遂げれる自分が爲すに非ずして如來自らが爲し給ふのである。眞に無礙であり自在であり、益々祈て不二が愈々密となり我に下される力―靈感がピン／＼と堪へ、體驗の感動が電光の如く駿足を極めて来る。

然し如來と俱なる我にして佛を裏切る折が猶更ら多くあることが目立つて来て、佛を置去りにして振返では氣付き戦うことが多し、「一定地獄ぞ住家ぞかし」「十惡の法然房」と血に泣く時が多い、「神よ我を見捨て給ふか」とは最も悦べる者の最も悲痛な叫びであります。淨土と地獄とが即して顯はれて来て、佛と惡魔との背合せ程壯烈なものはない。圓光赫灼たる成滿境裡は思ひも寄らぬが。此一上一下の争闘裡に展々として最後の歸結に急ぐ丈けは眞實であります、それが能ふ限りの價值であり佛の如實相であります。

無限の成佛道が全てであり、斯くあるが佛であり斯くあらしめるが佛の廻力と知り乍ら其又一切を與へしも佛か、統一の統一を究むるとき偉大なる神祕は終に還て跪ける自己の中に歸する、佛を佛する事も疑ふ事も出来ぬ唯だ許されたる可能は至心合掌であり念佛である、念佛の事實の中に如來も一切が生れる。「神の存在」は一切と超即して特一である。生れたる一つの業結ばれたる一の縁は永劫に不滅の點である、一切を藏め一切を引く起點であつて終焉である。靜であつて動である「靈魂の不滅」は終に解決し切れない解決である。我なる佛は全てが聖意の現れである。「自由意志」は疑ひ乍らの即信である。此三はカントの律し切れぬ最大

矛盾である。人類の最後に來る試験である。然して如來に生きることに由つて念佛に即する事に因て不解決の儘解決である。疑ひは信なり。最も高きに攀た人は最も低きに止つて居た。念佛の聲の中に一切が整て光てゐる。そして其一々が肉を超え脈を超へ體驗となつて具象の世界へ吐き出されて行く。

(八二―二―二二)

廻 力

全ての愛が私一人に注がれてゐる。

選ばれたる唯一人。

法界の王者。

一切を我れ愛せん。

一切と我れ俱ならん。

愛する力がない？

力を握てゐて何をトボけてゐる。

佛は愛だ。

他を佛せよ汝。

汝は愛の泉となるだらう。

便 り

宗教大學内白道會 私共の命が大切であればこそ無條件で神や佛に知らん顔で任せ切りにしておけない様な氣がする。私共が生きてゐると云ふこの事實を何より先きに解決しなければどうしてもじつとしてはゐられないのです。信じ切れぬい乍らもそうかと云ふて信ぜずにはゐられない、そこに人間の傷しい悩みがあるのではありますまいか。救はれんと苦悶のどん底から這ひ上つて指し伸べた縄らんとする手と、救はずにはおかないと云ふ温かい潤ひの中に輝いて垂れ給ふ救ひの手とが、こゝでしつかと握り合つた時救ひの事實が成り立つのです。そしてこの二つの手は唯祈りによつてのみ完成への救が創造され、そこに深酷な精進があり恵まれたる唯一の白道が開かれるのだと思ひます。この輝いてゐる白道への希念から幾つかの魂が抱き合つて白道會なるものを組織し魂の料理、人間を刻む祖としました。旬日の中には一回は必ず開く事にして居ります。去る十二日に慶六の田中木又先生に御講話をお願いする事になつて居りましたが、突然の御病氣で本當に残念でした。又續いて十三日から十七日まで毎日午後五時から九時まで小石川原町一行院で土屋觀道師の御指導の元に念佛三昧會を開きました。殆んど毎日風雨續きてましたが會員一同は物ともせず眞剣であるだけに、自力できへ得られない様な尊い經驗と亦靈化運動の中から魂の安らかさを覺えさせて戴きました。

(大野理事授)

光明教壇より 電氣もメートルにして明るく、庭慣れて大變美しくなりました。

○金曜夜七時 定日講演並自由俱樂部座談會

○第三土曜夜 修養講演會(西川光二郎氏其他)

寺院と教會を超えた自由人の集りです、皆様の御來聽を待つて居ます。

▲廣島教信兄より 理想の嬰兒がとうとう生れましたね、お産婆さんの君にしたら何處にかお嬉しい事でせう。先づ育先きの幸多かれと祈ります、と同時に二三の心付いた事を御參考までに申上ります。外親は上品すぎて親しみが足りません、内容も眞摯な熱烈さに過ぎてゴチなくはありませんか、もつと藝術的な潤ひを欲しいものです。熱烈な人の心を焼く力は有つても、春雨のシツトリと大地を濡めす様な偉大な親しみがありません、世尊の御說法が如何に藝術的な潤ひに充ちて居りましたか。生立ちの嬰兒に此應注文をするのは未だ無理かも知れませんが、唯ふくよかな發育を望みます。

▲中村辨康様より 昨日原稿(懺悔録)を二回分送らして頂きました、別に推敲してありませんから加筆して下さいませ、何分少し宛書きます爲めに如來様を離れて仕舞つた所もふいですが御許し下さいませ。創刊號を拜見いたしました、餘り硬過ぎて地方の一般信者にはどうかと思はれます。一部の青年には「持つて来い」でせうがね。其内何か純信仰の上から軟いものを書かせて貰ひませう。(以下次號)

編輯の後に

念佛三昧會案内

時日 四月十一日ヨリ十七日迄

道場 岐阜縣海津郡成山村行基寺

(大垣驛乘換養老線山崎驛下車約八丁)

導師 土屋觀道師

申込 行基寺宛

此眞生は皆様のものです。皆様の心の中にいつも眞實に新たに生きて行かれる如來の記録です。どうか此れを自分のものとして愛讀して下さい。一人も多くお勧め下さい、創刊も此刊も遅れましたが皆様の御指導と待て次からはもとと充實させませう。尙これには隠れたる金員の特志家や精神上の應援者のある事を衷心から感謝いたします。

○表紙圖案、玉稿
○信仰上の御質問
○其他御意見通信報告等
賜はらん事を望みます。

誌代は振替にてお願いいたします
振替口座
東京四七貳八八番 眞生社

大正十一年二月二日第三種郵便物認可
大正十一年二月二十日發行(毎月一回一日發行)

定價 一部十錢 半年六十錢 一年一圓

編輯兼 東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行人 土屋觀道

發行所 眞生社
東京市神田區駿河臺袋町一番地

印刷人 原子廣宣
東京市外西巢鴨町二七二番地

印刷所 無我山房印刷工場
東京市外西巢鴨町二七二番地

大正十一年二月二日第三種郵便物許可大正十一年三月十八日印刷納本大正十一年三月二十日發行(毎月一回一日發行)